

中学生連載企画 私たちのふるさと松山学 No.35

げたばぎの中学生

石田波郷(本名・哲夫)は、大正2(1913)年3月、温泉郡垣生村(現・松山市西垣生町)に生まれました。大正14(1925)年、垣生尋常小学校を卒業後、県立松山中学校に進学しました。入学試験の結果が良く、1年生の1学期に副級長に選ばれたそうです。

波郷は、家から学校までの往復で12キロという道のりを、カランコロンとげた音を響かせながら通学し

垣生中学校

一句一句の積み重ねが、「石田波郷」

は きょう

俳人・石田波郷は、私たちの住む垣生の出身です。小学校と中学校には波郷の句碑があり、私たちは波郷の句に見守られて成長しました。



ていました。松山中学校在学中に、友人・中富正三や村上露月の影響を受け、俳句作りに熱中しました。あまりに没頭したために、授業中に先生からたしなめられたそうです。

単身で上京

昭和5(1930)年、松山中学校を卒業し、余土村在任の五十崎古郷と出会います。波郷の俳号は、今出の浜の「波」と、古郷の「郷」に由来しています。古郷から渡された俳句雑誌『馬酔木』には、波郷が今までの見たこともないのびのびとした俳句が掲載されて

「惜命」の日々

しました。「伝統をやぶることは、新しさではない伝統と競う心が新しい俳句を生むのだ」と信じて、波郷は俳句作りに励みま

行いました。そして、昭和44(1969)年、56歳で亡くなりました。

俳句は文学ではない

波郷は、「俳句は文学ではなく、生の営みそのものだ」と言いました。そんな波郷の俳句を紹介します。

秋いくとせ石鎚を見ず母を見ず



垣生小学校の句碑

波郷が48歳のときに、『鶴』200号記念大会に参加予定でしたが、母親の病気のために帰郷し、参加しませんでした。そのとき詠んだのがこの句です。何回か秋が訪れても帰郷することができず、石鎚を見ることも、危機的な状態になるまで母を見ることもできなかった悲しさを表しているのでしょうか。そんな思いを想像しました。



母親と石鎚山

雀らも海かけて飛べ吹流し

この俳句は、昭和18(1943)年、波郷が30歳のときに作った句です。この年、長男の修大が誕生しました。

この俳句を初めて聞いたとき、小さいスズメらが、カモメたちのように力強く海の上を飛んでいるところを想像しました。この俳句には、威勢のいい吹き流しに、スズメらも負けないで飛び戯れよという思いが込められているようです。



海へ飛ぶスズメ

一つのことを極める大切さ

病気で苦しい時でも俳句を作った波郷は、本当に俳句が好きだったのだと感じました。一つのことを極めていくことはすごいと思います。もつと波郷のことを知り、校内での俳句作りに生かし、今後も垣生が俳句を身近に感じる地域にしていきたいと思



後列左から、神原友河さん(1年)、日野主義さん(2年)、石田健悟さん(2年)、山本良太さん(2年)、前列左から、梶田寿菜さん(2年)、木戸元萌愛さん(2年)、篠崎心寧さん(1年)

先人と文化の読み物教材
広がれ!
ふるさと松山の心



「語り継ぎたいふるさと松山」百話 I・II・III・IV もあります



松山ゆかりの先人78人と伝統文化や歴史のお話17話を掲載しています。購入方法など詳細は市教育研修センター事務局 ☎989-5144 へお問い合わせください。